

## 《書評》

# 『フィリピンのサリサリストア：流通構造と人々の暮らし』

舟橋豊子\*著、五紘舎、2021年

川 端 基 夫†

もう15年ほど前のことになるが、評者は、2007年～2008年に数次にわたってタイ東北部（ラオスとの国境近く）に通い、農村部の村々に分け入って、100軒余りの零細小売店（よろず屋）の経営実態を調査したことがある。現地で車とドライバーをチャーターし、何日も村の零細小売店を巡ってオーナーへのヒヤリングを実施した。現地はラオ語が主でタイ語は通じないため、ラオ語と英語が出来るコンケン大の学生・院生の手も借りた。その調査により、途上国の農村部（低所得市場）におけるコルゲートやユニリーバなどのグローバル企業による流通戦略や、現地に進出したグローバルリテイラーと零細小売店との共生関係を知るとともに、農村部の人々の消費感覚の実態に触れることが出来たことは貴重であった。評者のアジア市場への認識を大きく変えた調査であった（川端, 2007; 2017）。

フィリピンの零細小売業であるサリサリストアに光をあてた本書を手にとったとき、このタイでの調査が鮮やかに蘇ると共に、タイと比較しながら興味深く読むことが出来たことは幸運であった。また、それと同時に本書の背後にある現地調査の苦労も容易に想像ができた。とりわけ、農村部やスラムでの調査にはさまざまな苦労やアクシデントがあったことは想像に難くない。それを考えるなら、本書はまさに労作だと言ってよかろう。

本書の構成は以下のとおりである。まずは、各章の概要を述べていきたい。

### 序章

第1章 BOP市場とフィリピン市場への可能性

第2章 フィリピンにおける小売業の現状と変遷

第3章 チャネルの検討と加工飲料食品

第4章 サリサリストア

第5章 農漁村のサリサリストア

第6章 都市部のサリサリストア

第7章 製造会社におけるサリサリストアの役割

### 終章

---

\* 立命館大学政策科学部准教授

† 関西学院大学商学部教授  
mkawabata@kwansei.ac.jp

まず序章では、本書の目的が述べられる。本書は、近年注目を集めている BOP (the Base of the Economic Pyramid) 市場の可能性を念頭におき、フィリピンの低所得層が日々利用する「サリサリストア」と呼ばれる零細小売店の分析を通して、BOP 市場における商品流通（仕入れや販売方法）の実態や、低所得層の購買力の解明をめざすことを目的としている。そして、このサリサリストアの研究は BOP 市場への参入（展開）に道を開くものと位置付けている。また、サリサリストアに着目する理由としては、それが都市、農漁村の別を問わずフィリピン全土に分布し人々の生活に欠かせないものになっていること、国内製造業の加工飲料食品のチャネルとして重要なものとなっていることから、BOP 市場を探るには適していることが挙げられている。

第 1 章では、BOP 市場の定義と概要、その規模と課題などが整理されたうえで、フィリピン市場の低所得性や BOP 層の実像、そして都市スラムの人々の生活にも触れられている。また、BOP 層の人々は家計における食料品への支出割合が高いことや、十分な現金収入が無いことから、そこに向けての販売活動には工夫が必要となることが指摘されている。

第 2 章は、フィリピンの小売市場の現状とその変化を分析している。フィリピンの小売近代化は、スペイン系と中華系の財閥系企業グループによって進められてきたこと、2000 年代以降は日系を含む外資小売・飲食業の進出も増大してきたことが指摘される。結論的には、現在のフィリピンではハイパーマーケットやコンビニエンス・ストアなどの近代小売業が発展する一方で、サリサリストアも多数見られることが指摘されている。

第 3 章は、Rangan が整理した流通チャネルの 4 形態が確認された後に、サリサリストアの主要販売商品である加工飲料食品の製造業によるチャネル政策に焦点が当てられる。具体的には、大手五社のネスレ・フィリピン、ユニバーサル・ロビーナ、サンミゲル・ピュアフーズ、サンミゲル・ブルワリー、コカ・コーラ・ビバレッジズ・フィリピンが取り上げられ、フィリピンでの事業概要が整理されている。

ここまでは、いわばサリサリストアを分析するに際しての、基本知識の整理の章と言って過言ではない。この後の第 4 章から第 7 章がサリサリストアの実態分析の章となる。

第 4 章は、零細小売店の特性を巡るこれまでの一般的な議論をふまえて、それが途上国経済の中で果たす役割が整理されている。まず、零細小売業は少ない資金で開業可能な生業的・副業的なものであること、その保護を巡る議論が以前から存在すること、経営組織特性や取扱商品特性から赤字でもすぐには廃業されない（継続性が高い）こと、寡占的製造業者には零細小売業は利用価値が高いこと、といった既存の議論に基づく零細小売業の特性が整理される。これを踏まえて、フィリピンの小売事業者総数の 9 割を占めるとされるサリサリストアの実態が紹介され、それが従来の議論で指摘されてきた零細小売業の特性を備えていることが示される。ただし、フィリピンのサリサリストアは貧困層を相手にするゆえ、バラ売り・量り売り・貸出しをすること、ツケ払いが多いこと、冷蔵庫がない家庭の冷蔵庫代替機能を果たすこと、なども指摘されている。また、サリサリストアで扱われる多国籍企業の商品が整理され、多国籍企業の商品を全国にくまなく届ける重要な流通チャネルとしてサリサリストアが機能していることが確認されている。

第 5 章は、農漁村のサリサリストアの実態が、現地調査によって明らかにされている。ルソン島・サマル島・レイテ島の計 159 店舗が調査され、店主 159 人および来店客 3 人とサプライヤー 2 人へのインタビューが行われている。調査内容は、取扱商品（仕入・販売方法含む）、現地の庶民生活や多国籍企業商品の浸透具合、チャネル構造、山岳地帯における加工飲料食品卸売業の役割や機能、

などである。この調査から、商品は卸売業のみならず大型小売店や農家からも調達されること、仕入れに際しては仕入れ先との地理的距離、バラ売りが可能かどうか、仕入れ代金が高額にならないことなどが重視されるとしている。また、仕入れにも販売にも後払い（ツケ）が利用されていたことも指摘されている。後払いで販売する要因は、農村部では近隣に親戚が多かったり、長年の顔見知りが多いことによるとされる。本章では、日用品や加工飲料食品のサリサリストアを介した流通チャンネルの分析もなされ、7つのチャンネルの存在が確認されている。さらに山岳地帯では、小型のサリサリストアは大型のサリサリストアからも商品を調達しているとしている。

第6章は、都市部のサリサリストアの実態が、やはり現地調査によって分析されている。マニラ首都圏とレイテ島のタクロバンが調査地域となっており、計38店舗が調査され、店主38人、来店客20人、サプライヤー7人へのインタビューが行われている。調査内容は農村部への調査と同じである。都市部では、生鮮品は市場から、日用品は大型スーパーや大型のサリサリストアから仕入れるとされる。また、首都圏では加工飲料食品において卸売業（販売会社・販売代理店・特約店）のサリサリストアへの関与が農村部よりも強いとされ、飲料については委託販売も行われているとされる。販売については、顧客との関係が農村部より希薄なこともあり、現金取引が主流となっていることが指摘されている。

なお、この章では、マニラの都市スラムであるトンド地区のサリサリストアも調査されており（5店舗、26人へのインタビュー）、この地区の人々の消費生活実態が描かれている。都市スラムでのサリサリストアの実態は、貴重な情報といえよう。

第7章は、大手の製造企業がサリサリストアをチャンネル政策的にどう利用しているかが検討される。具体的には、ネスレ・フィリピン、サンミゲル・ブルワリーと共に、日本のヤクルトが取り上げられ、3社それぞれのサリサリストアを介した流通チャンネルの形態およびその活用実態が詳しく整理されている。その分析からは、各社が全国にくまなく商品を供給するためのチャンネルとしてサリサリストアを重視しており、そのための各社独自の流通システムが構築されていることが明らかにされている。

終章では、改めて各章のまとめがなされたうえで、本研究で明らかにされたことが整理されている。

以上、本書の概要を述べたが、本書はフィリピンのサリサリストアおよびBOP市場の実態に切り込んだ、最初の研究書である。本書の貢献としては、少なくとも以下の6点が指摘できる。

- 1) フィリピンのサリサリストアの取扱商品や仕入れ・販売の特性を、現地での多数のインタビュー調査によって解明したこと。
- 2) 加工飲料食品の卸売業が、フィリピンのBOP市場で果たしている役割と機能を、現地調査によって解明したこと。
- 3) BOP市場におけるサリサリストアを介した流通チャンネルのタイプ分類をしたこと。
- 4) 農漁村部、都市部、都市スラムといった地域ごとに、サリサリストアの質的な違いを解明したこと。
- 5) BOP市場への参入に成功している大手の加工飲料食品メーカーが、サリサリストアのチャンネルをどのように利用しているのかを解明したこと。
- 6) サリサリストアが地域社会（コミュニティ）で果たしている組織的・相互扶助的な役割を明らかにしたこと。

どれも、今後の途上国市場を理解するうえで、そして途上国市場への参入戦略を考える上で極めて重要なものといえ、それらを現地調査によって解明した著者の功績は大きい。

評者も、かつてフィリピンのサリサリストアやタイのタラート（小売市場）を少しだけ調べたことがあった（川端, 2005）。本書のような詳細な調査ではなかったが、それでも低所得市場には共通した消費のあり方が存在することが理解できた。つまり、居住地の近隣に立地する伝統的小売市場や零細小売店は、ごくわずかな現金収入（日銭）で日々の生活を営む人々にとっては、必要不可欠な存在となっていることである。たとえば、タラートでは生鮮品を必要な分だけ量り売りしてくれ、価格も交渉次第である。零細小売店ではタバコは1本ずつ、酒も1杯分ずつ売ってくれる。その日の稼ぎが無かった場合でも、ツケ払いで必要なものが買える。しかも近隣なので交通費も不要である。その意味では極めて合理的な存在なのであり、本書でも指摘されていたように、社会的な相互扶助の機能も果たしているといえる。とりわけ、ツケ払いは、零細小売店がマイクロ金融機能を果たしていることを意味しており、それは低所得市場におけるローンや割賦払いの仕組みが、耐久消費財の市場拡大を生じさせていることにつながるものといえる（川端, 2017）。

本書は、このような評者がタイで得た知見をフィリピンでの詳細な調査に基づいて裏付けてくれたといえ、まさに我が意を得る思いで楽しく読み通せた。フィリピンとタイの実態には、共通する部分が多くみられた。とはいえ、解明されたファクトの整理の仕方については一考の余地も感じた。一般に現地調査研究では、解明された多様な発見事項を、どのようなストーリーで整理し、そこからどのような理論フレームを構築するのが難しい課題となる。本書は、第5章で農漁村部のサリサリストアを、第6章で都市部のそれを分析したうえで、終章で改めていくつかの視点から地域的な違いを比較している。それも1つの整理の仕方であろうが、地域ごとではなく、商品の調達と販売、卸売業との関係といった観点ごとに章を立て、各章で農村部と都市部あるいはスラムを比較分析する組み立てにした方が、話の筋が明確になり、新たなBOP市場の捉え方のフレーム構築に近づけたかも知れない。また、示唆に富む話を語ってくれた店主や来店客、サプライヤーについては、コラム的に詳しく紹介するなど、BOP市場の「アクターの顔」が見える切り口があれば、臨場感がより増すとともに読み手の理解が深まったのではないかとも思われる。

もちろん、これらは本書の価値を揺るがすものではない。最後に評者の勝手な願いを書かせてもらうなら、本書を踏まえ、BOP市場の人々の消費生活と価値観をより生き生きと伝える後続書を期待したい。現地に深く入り込んだ著者であれば、難しくはなかろう。

## 参考文献

- 川端基夫（2005）『アジア市場のコンテキスト【東南アジア編】』新評論。  
———（2007）「グローバルリテイラーと途上国市場のコンテキスト：タイ東北部における零細小売業との共生関係」『龍谷大学経営学論集』47巻3号, 66-76頁。  
———（2017）『消費大陸アジア：巨大市場を読みとく』筑摩書房。